

京都大学	博士(文学)	氏名	依 田 義 右
論文題目	マルブランシュ研究 — la vision en Dieu の証明における 枚挙の完全性の根拠を中心として —		
(論文内容の要旨)			
本論文は副題に示された方法すなわち「証明における枚挙の完全性の根拠」の検討を通じてマルブランシュの中心命題「われわれはすべてのものを神の内に見る」という命題を理解しようとするものである。具体的には、マルブランシュがこの命題を証明するにあたって採用した方法である「われわれが外の対象諸事物を見ることができるとすべての仕方の区分」五項目をまず枚挙し、いちいちを検討して消去法によって残ったものを正しいとすることは、枚挙の仕方が完全であることが前提とされるにもかかわらず、マルブランシュはそのことを明示的には示していないという点から出発して、その根拠を問うことでマルブランシュ哲学の性格を明らかにしようというのが本論文の目的である。マルブランシュが自己の最も重要な理説の証明において、その基礎である枚挙の完全性を問われるような窮地に自分を追い込むようなやり方をわざわざとったのはなぜか、この不思議を解きたいというのが論者のそもそもの出発点である。 本論文は序論と五つの部および結論と参考文献表から成り立っている。 第一部「枚挙の完全性の意味」は、「枚挙の重視」「枚挙の意味」「枚挙の完全性は証明されるべきものか」「枚挙は完全であるべきか」の四章に分かれ、デカルトの『精神指導の規則』に発した「枚挙」がアルノー＝ニコルの『論理学』に受け継がれ、さらにライプニッツ(予定調和を証明するうえでの「柱時計の比喻」)やカント(カテゴリー表の完全性の証明)においても継承されている問題意識であることが示される。この部分はいわば枚挙の概念史の素描が試みられており、枚挙に関しては枚挙の完全性という問題が中心にならざるを得ないということが示されている。 第二部「la vision en Dieu」の証明の枚挙の完全性へのマルブランシュの姿勢」は「la vision en Dieu の証明の枚挙の完全性へのマルブランシュの確信」および「la vision en Dieu の証明の枚挙の完全性を疑わせるマルブランシュの言説」の二つの章からなり、それぞれ、マルブランシュがデカルトの枚挙の方法に依存しておりしたがって要求される枚挙の完全性に関して自信を示していること、しかしまた同時に枚挙の完全性に関して自ら疑っているような表現も散見し、このことを理解するためには、マルブランシュの五通りの証明そのものを詳細に検討してその完全性あるいは完備性の根拠を探る必要があることが結論されている。 第三部「la vision en Dieu の証明の枚挙の完全性の検証」は「第一の仕方の概要と検討」、「第二の仕方の概要と検討」、「第三の仕方の概要と検討」、「第四の仕方の概要と検討」、「第五の仕方の正しさの積極的証明すなわち六つの理由」、「われわれの精神			

は明晰判明に認識されない」、「可知的延長について」の七つの章に分かれている。マルブランシュが「われわれはすべてのものを神の内において見る」ことの消去法による証明のために枚挙した五通りの説は以下のようなものである。すなわち 1「物体的対象諸事物は、それらに類似した形象を送る」、2「魂は諸観念を生み出す仕方である」、3「われわれは、われわれとともに創造された諸観念によって諸対象を見る」、4「魂は自ら自身の内に、自らがこれら物体の内に見るすべての完全性をもつ」、5「われわれはすべてを神の内に見る」以上の五通りである。ここではこの点に関してロックがマルブランシュに加えた批判を相手取ってマルブランシュに代わって反論したジャチント・シギスモンド・ジェルディル (1718-1802) の著作を活用してマルブランシュの論点そのものの理解を深めることが試みられている。そのうえで最初の四つの説が斥けられ、のこった第5の説に対してマルブランシュが提出した「積極的証明」としての六つの理由が検討され、それらが神の摂理の一般的諸法則、特に「神の振る舞いの単純性」へと収斂してゆくこと、la vision de Dieu が一つの聖書解釈になっていることが明らかにされている。

第四部「la vision en Dieu の証明の枚挙の完全性の根拠一枚挙の数5の根拠」は「五つの仕方は、何の区分であるか」、「枚挙の数3の根拠としての神・精神・物体の3実体」、「枚挙の順序の根拠」の三つの章に分かれている。ここではアウグスティヌス、トマス・アキナス、デカルトを通覧するという手続きを踏まえて、アウグスティヌスの三つの存在（神・魂・物体）と、デカルトの三つの実体（神・魂・物体）を受け継いだマルブランシュでは神、魂（精神）、物体（身体）という三つの実体が考えられることがまず確認された。さらにマルブランシュの挙げる五つの仕方は観念の真の起源を示すものではなく、「観念が今現在どこにあるか」という区別であるという解釈が提出され、それに基づいて「物体」「精神」「神」という三つの場と、この精神という場に、さらに物体・精神・神の三実体が、第二の仕方（物体からであることを知りながら観念を生み出すと考える仕方＝物体に親近な仕方）および第三の仕方（観念をもともと持っているという仕方＝精神に親近な仕方）、第四の仕方（観念を自己認識する神のような仕方＝神に親近な仕方）としていわば映し出されることが明らかにされた。こうして枚挙の数5が網羅的である、すなわち完全であるということの根拠が発見された。またさらに一般化して、デカルトの精神の内の観念の起源の三つの仮定つまり、「外来」、「生得」、「作り出された」の三つの仮定から得られた自明の原理、すなわち、「外から」「もともと」「作り出す」ことを、「精神」の「内」に「今現在」の観念の在りどころを置く三つの仕方（第二、第三、第四）に対応させることができる。この自明の原理と、物体・精神・神の三者が第二、第三、第四の仕方に対応しているということを重ね合わせると、第一の仕方（物体からのスペキエースの飛来）、第五の仕方（神の内に観念を見る仕方）を合わせて、都合、五通りの仕方しかないことが明らかになるのである。

第五部「la vision de Dieu の証明の枚举の完全性の根拠（神・精神・物体）を確信させるもの」は「マルブランシュの摂理思想」、「マルブランシュの光の形而上学」の二つの章からなる。ここでは枚举の完全性の根拠（神・精神・物体）を確信させる、あるいは保障するマルブランシュ自身の二つの思想、すなわち神の摂理の思想と、光の形而上学とを提示し、前者に枚举の完全性の根拠（神・精神・物体）が織り込まれていること、および、この両思想がかかわりあっていること、すなわち、神の摂理の一般的諸法則が神の光でもあるということが示されている。このことはマルブランシュ自身が la vision en Dieu が「神こそがわれわれを照らすのだということを理解させるため」だったと言い切っていることとつながる。マルブランシュの la vision en Dieu は背後に神の摂理の思想と光の形而上学とを秘めたスケールの大きな概念である。

さらに最後に「結論」がおかれ、本論の内容を整理するとともに、vision en Dieu という思想がヨーロッパ哲学史ないし思想史ににおいてもつ位置と意義が示唆され、本論文では取り扱うことが見送られた今後の研究課題に関しても言及されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ニコラ・マルブランシュ (1638-1715) の哲学の核心的命題として有名な「神においてみる」を、副題に示された「la vision en Dieu の証明における枚举の完全性の根拠」を徹底的に「中心」とするという方法で解明したものである。わが国にはマルブランシュ研究の伝統はなく、わが国の哲学史の概説のなかではヨーロッパでおこなわれている教科書的記述を踏襲してマルブランシュに対してはデカルトがのこした心身二元論の難点を「機会原因論」という理説によって解決しようとしたという一点にしぼった取り扱いがなされてきた。しかし近年 Steven Nadler を中心に英語圏でもマルブランシュ研究の水準が高まりつつあることを踏まえるとき、わが国でも本格的なマルブランシュ研究の登場がひさしく待望されているところであった。本論文は論者のライフワークとも言うべきものであって、Guérout、Gouhier や Rodis-Lewis をはじめとするフランスにおける研究の伝統を十分に吸収したうえで論者の独自の着眼点がマルブランシュのテキストに対する長く深い親しみに支えられた、手ごたえある成果を生み出しており、わが国のマルブランシュ研究の礎としての役割を果たすものである。

本論文の主要な論点とその意義は以下のようなものである。

まず第一に、論者自身が強調するように、マルブランシュ哲学の核心に迫るための独創的な着手点の発見である。マルブランシュ自身の論述の順序を再構成して論者はそれを『真理の探究』第3巻第2部第2章第2節「われわれが外の対象諸事物を見ることができるすべての仕方の区分」において見出した。この箇所は「われわれが外の対象諸事物を見ることができるすべての仕方の区分」と題されており、いわゆる認識論上の問題として次の五通りの可能性が示されている。すなわち 1「物体的対象諸事物は、それらに類似した形象を送る」、2「魂は諸観念を生み出す仕方である」、3「われわれは、われわれとともに創造された諸観念によって諸対象を見る」、4「魂は自ら自身の内に、自らがこれら物体の内に見るすべての完全性をもつ」、5「われわれはすべてを神の内に見る」である。ここでマルブランシュの叙述は最初の四つの可能性が否定されることが最後の可能性すなわち「われわれはすべてを神の内において見る」をおのずと正しいものとして残す、というものである。しかしながら消去法によって残ったものが正しいとされるためには枚举が完全であることが必要である。ところがマルブランシュ自身は明示的にこのことを証明していない。論者はこの根拠を求めて、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、デカルトを検討して神・精神(魂)・物体の三者という基本的な枠組みを見出し、さらにこのうち精神に対して神・精神・物体が、第二の仕方・第三の仕方・第四の仕方として映し出されていると解釈することで、第一の仕方(物体)および第五の仕方(神)と合わせて五個の仕方が必然化される、という解決策を示している。このような体系性がマルブランシュの枚举の内に秘められていることの発見は論者の独壇場として評価されねばならない。

第二に、上記の「われわれが外の対象諸事物を見ることができるすべての仕方の区分」についてロックがマルブランシュに加えた批判を再批判するために、ジェルディル (Giacinto Sigismondo Gerdil, 1718-1802、バルナバ会修道士) という人物を発見し活用したことである。マルブランシュ自身はロックには答えないままに世を去ったが、1748 年になって『観念の本性や起源についてのマルブランシュ師の見解の擁護』と題する著作で本人にかわってロックに反論している人物として論者が見出したのがジェルディルである。ジェルディルはロックにもマルブランシュにも精通している人物であり、ありうべかりしマルブランシュの反論を代弁させて理解を深めるという方法は非常に興味深いものがある。また従来のマルブランシュ研究ではジェルディルが言及されることはあったとしても名前のみに近く、論者のような積極的な活用は例を見ない。ジェルディルの論点が論者の論点を固めるうえで役割を果たしている点をも含め、マルブランシュ研究上の重要な貢献であると認められる。

第三に「可知的延長」という難解な概念の解明である。古代哲学にもデカルトにも出典を求めることができないこの概念は、アルノーによって厳しくかつ執拗に批判されたものである。論者はマルブランシュの主著『真理の探究』にとどまらずそのほかの著作を渉猟し、アルノーの著作からの豊富な引用をも交えて詳しく検討して「色による可知的延長の個別化」という論点に注目してそれが「一から多への瞬時の移行」として「神の振る舞いの単純性」を示すことを確認している。また自然的判断、物体の運動、幾何学的真理、全質変化などの幅広い事象に関しても「可知的延長」が関与していることが指摘され、全体として「可知的延長」は「神の摂理の法則」という枠組みのうちで理解されるべきものであることを論者は明らかにした。もちろん論者自身が自認するように難解さが解消されたわけではないが、いたずらに特異で難解な理説ではなく体系的な位置を有するものであることが示された点の意義は大きいと考えられる。

第四に、マルブランシュを取り巻く 17 世紀の哲学者たちと神学者たちの活発な遣り取りの現場を豊富な引用によって提示することで、17 世紀の哲学者たちや神学者たちの思想が相互交流を重要な媒体として形成されてきたものであることが示されたことである。この点は本論文ではまだ脇役であるアルノーやライプニッツ、スピノザをもこのような磁場において理解してゆくこれからの研究方法を示唆するものとして、学界に対する意義を有すると認められる。

第五に、従来のわが国の近世哲学史研究においてはとかく排除されがちであった宗教的神学的な面を避けることなく取り上げて、フランスにおけるデカルト研究およびマルブランシュ研究の蓄積をより十全に継承することへの誘いの役割を果たしていることである。論者は中世哲学史の知見も有しそのことは本論文でのトマス・アクィナスやアウグスティヌスへの言及として現れているが、哲学史研究上の幅広い視野の必要性を訴えるものとしてこの点もまたライフワークにふさわしい内容を持っている。

以上に挙げたもの以外にも本論文には多くの貴重な知見がちりばめられている。*intelligible* という語の近世的な意義をマルブランシュからの用例収集によって明らかにしようとしたことはその一例である。しかしながら次のような難点もまた見いだされないわけではない。まず、全五部のうち第三部が全体の三分の一近くの分量を占めるなど構成がバランスを欠くこと、引用文が多すぎて不必要に膨大化していること、テキストの読みは達成されたものの、その哲学的な分析が必ずしも十分ではないこと、などがそれである。しかしこれらの点は、本論文の価値を損なうには至っていない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成24年9月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。